

# Fリーグのプロリーグ化に関する研究 A study of the professionalization of the F.LEAGUE

1K07B507-7

竹井聡志

指導教員 主査 原田宗彦 先生

副査 作野誠一 先生

## 【研究背景】

2007 年、東京・国立代々木競技場第一体育館で、日本初のフットサル全国統一リーグが誕生した。「日本フットサルリーグ」である。愛称は「F.LEAGUE (F リーグ)」である。2010 年シーズンは 10 チームによる 27 節・135 試合が行われる予定である。

白畑 (2007) は、F リーグについて、「プロリーグと称されることが多いが、現時点ではプロリーグではない。しかし、将来的にプロ化へ、そしてオリンピック競技種目へという活動も行われている。」と述べており、F リーグがアマチュアリーグであることを指摘した。しかしながら、先行研究において、F リーグがプロリーグであるかどうかの特化した論文はなく、プロリーグ化における F リーグの状況を示した論文はない。このため、設立から 4 年目の F リーグにおいて、「プロリーグ化」が進んでいるのか、またプロ化に向けた進展がないのであれば、そこに阻害要因としての課題があると考え、明らかにしたいと考えた。

## 【目的】

シュライカー大阪、府中アスレティック F C、バルドラール浦安の F リーグの各チーム、F リーグ事務局に対し、インタビュー調査を実施することで、F リーグのプロリーグ化への課題を明らかにし、リーグへの提言を行うことを目的とする。

## 【方法】

本研究は、2010 年 11 月 24 日から 12 月 7 日までの 15 日間にわたり、インタビュー調査、文献検索を行った。インタビュー調査は、F リーグに加盟している各チームの関係者 8 名、F リーグを主催している F リーグ事務局の総務理事 1 名、元日本フットサル連盟理事 1 名に対し、インタビューという質的方法を採用しデータ収集を行った。質問項目は、渡辺 (2007) によって得られた情報から、プロ化に関するサイクルを作成し、そのサイクルに沿った形で作成した。調査項目は①スポンサー②観客動員③チームと選手間の契約④練習環境・選手強化・選手育成⑤メディアとの関係である。

## 【結果】

①中村氏「費用対効果でいくら利益がもたらされたのか。ましてやマイナースポーツのスポンサーはクライアントにとって価値を作り出すことが難しい。」②塩谷氏「来てくれる絶対数は決まっている。見てない人を増やさないと。」③中村氏「一番の問題は、選手達が生活を犠牲にしながらやっている。」④塩谷氏「練習環境はよくなった。」⑤塩谷氏「メディアは、クラブとしてできる限りのことはしているが、フットサルの紙媒体・雑誌媒体が少ないから、メディアの露出が少ないのが一つ。」

## 【考察】

スポンサーの獲得についてはチーム、リーグともに難しい課題であることが明らかになった。観客動員の方策はさまざまであると明らかになった。観客動員を考える上で、アリーナの大きさ、人気選手の存在が重要であると明らかになった。選手との契約は各チームにより、異なり、プロ選手かどうかの判断はチームにゆだねられていると明らかになった。基本的にはフットサルで生活することは難しく、チームが仕事を斡旋することなどが必要である現状がある。練習環境・選手強化・選手育成については、改善されてきたといえる。メディアに関しては、コンテンツの価値が低いとされている現状がある。

## 【結論】

本研究で明らかになった今後の課題としては、「財政面の確保」「露出」「認知」が挙げられる。

最後に、研究の限界と今後の課題として、2 点挙げることが出来る。1 点目は調査対象としたチームが 3 チームであり、偏りが挙げられる。また、2 点目は選手側からの視点がなかったことが挙げられる。今後の課題として、「F リーグ」の全 10 チームについても調査を行い、F リーグ全体の現状を的確に把握する必要があると考えられる。